

巻頭言

樋口 和秀*

機能性消化管疾患には、上部消化管疾患では、食道疾患である非びらん性胃食道逆流症(NERD), functional heart burn, reflux hypersensitivity と、機能性ディスペプシア(FD)がある。一方、下部消化管疾患では、過敏性腸症候群(IRS), 慢性便秘症や慢性下痢症の一部がその範疇に入ってくる。これらの疾患に関する概念、疫学、病態、治療法などに関しては、いろいろな研究がなされ、それらを基に、種々のガイドラインが刊行された。

胃食道逆流症(GERD)に関しては、1980年代から世界的に GERD に対する関心が高まり、本邦においても、2009年に「胃食道逆流症(GERD)診療ガイドライン」が発刊され、2015年に改訂されて、さらに2021年に改訂版が発表されようとしている。一方、2014年、日本消化器病学会は関連学会と協力し、IRSとFDに関する診療ガイドラインを刊行し、IRSは2020年に改訂第2版が発刊され、FDは2021年に改訂版が発表される予定である。

これらのガイドラインに大きな影響を与えたのが、国際統一基準を提唱し続けてきた Rome 委員会による Rome IIIである(1988年に Rome Iが発刊され、改訂を重ね、現在の Rome IVに至る)。Rome IIIから Rome IVへの興味深い展開は、脳と腸(胃・食道)の相互作用のエビデンスが蓄積され、「脳腸(消化管)相関」を全面的にアピールした点である。そのうえで、運動障害や内臓知覚過敏、炎症やサイトカイン・ホルモンなどと粘膜機能の変化、腸内細菌叢の変化などとの関係に展開されてきた。最近では、さらに、脳-腸-腸内細菌相関という言葉までできてきた。

もう一つのガイドラインの特徴は、従来の臨床疑問(clinical question ; CQ)とともに「すでに結論が明らかなもの」は背景疑問(background question ; BQ), 「エビデンスが存在せず、今後の研究課題であるもの」は未来研究疑問(future research question ; FRQ)と、三つの Question 形式となってきた。たとえば、今回2020年発刊の「過敏性腸症候群(IRS)診療ガイドライン2020」改訂版は、第1

Kazuhide Higuchi

*大阪医科大学第二内科(〒569-8686 大阪府高槻市大学町2-7)

章の疫学・病態と第4章の予後・合併症ではすべてBQの8項目と3項目とされ、第2章の診断ではBQ1項目、CQ4項目、第3章の治療はCQ22項目とFRQ3項目からなり、内容的には治療に重点がおかれている。このように、IBSの診療ガイドラインは2020年に刊行され、GERDとFDの診療ガイドラインは2021年に発表が予定されており、それらの発刊および発刊に先駆けて最新情報のエキスをわかりやすく読者の方々に届けられることを喜ばしく思う。

慢性便秘症や慢性下痢症に関しては、これからいろいろと研究がされていくと思われるが、現時点での情報をお届けしたいと思う。それぞれエキスパートの先生方をお願いしているので、どうぞ内容をお楽しみいただきたい。